#### 東京農業大学世田谷学術情報センター(図書館)

### 大学史料室通信

【語釈】

府→

鎌倉。



2012. 12. 1

大学史料室所蔵史料の紹介(一)

榎本武揚の書(一八九二年(明治二十五年))武揚五十七歳

鎌府江山入晚鴉過秦有客

懷長沙路傍苔石留城址化

作尋常百姓家

壬辰二月過鎌倉有感詩以紀之梁川

【書き下し文】

鎌府江山晩鴉(ばんあ)入る

路傍の苔石城址を留め

化して尋常百姓(ひゃくせい)の家と作る 壬

過秦の客有り長沙を懐う

辰二月鎌倉に過(よ)ぎりて感有り、詩以って之を紀(しる)

過秦→過秦論。

客→賈誼のこと。前漢の文人・政治家。文帝に仕えて種々の改革 を図ったが保守派に阻まれて左遷された。

長沙→賈誼が流された土地。

百姓→ここでは農民の意味ではなく人民の意。

【大意】

第一句二句

鎌倉の山河では、鳥が鳴く夕刻となり、私は秦の時代の過

第三句四句 この鎌倉では道の傍らの苔生した石には、いにしえの城の跡 留めているが、今は市井の人々の家となっていることだ。 を記した賈誼や彼が流された長沙の町に思いをはせる。

之を記した。 壬辰二月に鎌倉に立ち寄って感慨があって、漢詩を作り

快長沙飯信苦石品旗心化 之人一月 となるの感治はんと 府江山入晚鵝過秦有岩 梁 11

晩鴉→夕方のからす。夕暮に飛ぶ鴉。

### 横井時敬の 熊 **|本時代**

榎 本·横 井 研 究 会会 員 本学元 講 師

馬 登

にも伝承することが少なかった(横井時 過ごしたが、 横 にも 井 時 未詳の点が多い。 敬 先生(以 時 敬は著書であ 下「時 熊 敬」と省 本に生まれ十八歳 まり 言及せず、ご家 略 ·燁氏教示)。 <sub>の</sub> 熊 本 時 ※まで 代は 族

る 日 四 発表)。 機会を得て本学で口 五 さいわい筆者は先年生家跡を見付け(『地図中心』 五号発表)、 今年はご生家のご子孫にお目にかか 頭 発表が出来た(七月二十三

をお願いします。 左にその概略を 記 読 者 諸 氏のさらなるご教 示

だいた。 お話を聞き、横井家菩提寺と墓所をご案内していた 時 弘・恵美子ご夫妻をご自 多くの方々のご教示により 深く感謝致 左に 略 系図 します。 と墓 所 宅に訪ね、 写 熊 真、ご夫 本 市 新 資料を戴 屋 妻写 敷 町 う真を掲 横 き

祀 男であるが、 任 i) 時 務を全うし 弘 氏氏は 略系図の如 父時 た。 そしてご仏壇を守り、 氏の老後を最後まで介護 横井家十一 代時 墓 生所をお 氏の

0

う。 命 雄 九 氏 語っていないのは 横 (覺(さとる)氏(時敬実兄)は 井家八代久右 (時 郷 敬 甥 時 愛は )は三十八歳で没 敬はご子息を熊 強烈なものが この寂 衛門氏 しさによるものと筆者は思 (時 敬実父)は した。 本第 あるが、 四 五高等学校に + 生 六歳、 家の当主は 生家をあ 四 十 十代 五 上 歳、 ま 短 寅

> る 潟 現

敷

横

敬

思う

末はこの

石

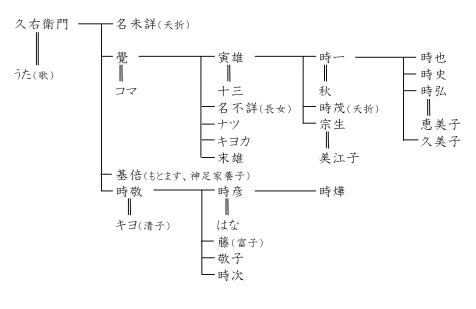
この

(五十

四

歳

熊本·横井家略系図



とは 市 在に至っている。 から春竹町へ、さらに明治 が、 て 井 熊 明 年 家は あ 本 甥の子の世代である。 石 る。 龄 市在 市に が 西 冠 四 南 在 住は 婚葬祭など生 + 戦 勤 + 九 争で荒 主に L 歳 八 代 も離 十三歳の天寿を全うしてい 退 時 廃 職 机 末 した内 交流は淡いものと筆 家とは交流があったと 後のようだ。 ている。 氏は 年に 農 坪 新 時 屋 林 井 生敷町に 敬 :省に 町 没年に十 そ 0 武 勤 8 移 家 新

> は 想像 する。

るようであるが、なにしろ 4帳の閲 i) は 去帳写真を送って戴いたが 浄 時 出来なかった。 寺(しんじょうじ)を訪ねたがご住職が留守で過 返 墓誌は九代覺以降 氏は昭 すような調査は次の機会と考えている。 覧は出来なかった。後 所(寄墓)を市営墓 四 + また横井家の仏壇に過去帳があ 年代、 から記載されている。菩 初対 散在 部 日、 面である。 分的であり充分な 土地に していた墓所 時弘氏からお寺の 建てお ・壇をひっ を整 分

過

() 育、 時 時 L 敬 敬 次 かしこの 校 の実父久右衛門は一族の著名な学者 の生い立ちを考察するには の機会に詳 時 習 館 課 題 教 育、 は 述したい。 深く広い。 熊 本洋 学校教 ここではその展望を 幼 少年の 育は欠 横 家 か 井 庭 せ 教 小

記

の門弟であった。 小楠グループは 実学党派とよ ば

机

藩

政

楠



横井時弘・恵美子ご夫妻(於ご自宅)

派 力 ば 校 対 た。これ 新 改 がい な 党 す 派 革 藩 机 で とよ る 保 る 肥 0 た。 あっ 学 革 後 守 強

の収集と分析で可能であると筆者は思う。 か。 父は逝去している。時 的 接 学党と学校党の政争が激しい。この実学党革新派の 父のもと時敬はどんな家庭教育を受けたであろう 雰囲気で育ったと想像されるが、時敬七歳の時に 的 残念ながら直接的史料はないが、 、史料はある。熊本の高い伝統的文化と父の革新 、敬の家庭教育復元は間接史料 、その周辺的、間

移

ど)を見付けたいものである。 目 史 熊 しかし何歳で入門したかの報告を筆者は知らない。 録を見て心当りの史料を直接調べ、時敬の直接史 |料がある。 厖大な大史料集で目録もある。 丹念に [本大学文学部保管の「永青文庫」に時習館関係の 時 敬が藩校時習館に入門したのは確実のようだ。 (門帳など)や周辺史料(教科課程、 教科書な

学校に入学し、一八七五年(明治 八七一年(明治四年)九月一 日、時 八年)七月二十七 敬は熊本洋

15

卒

業

L

た。その後



を

勤めた。

同

校

助

手

入学の動機

ŧ

洋学校

人

教

師

東

る。 った論文と共に公表されることを期待している。 る。 党と学校党の激しい政争によるものと筆者は推 である。しかし洋学校の史料は意外にも少ない。実学 会も発足(筆者も加入)し、多くの市民も参加してい わい地元熊本で洋学校再評価の声は高く、近年研究 動により史料の保存と消滅は影響を受ける。さい 洋学校は実学党の人々による開校である。権力の 時敬の直接的史料や間接的史料はその史料を使 ...測す

る。 る け、 い。「生誕之地碑」を建立し、 時 熊本市民の多くは時敬の存在したことを知らな 東京農業大学の永続を筆者は熱望するものであ 敬の熊本時代の研究は始まったばかりの感があ 絶えず市民に呼び か

が再認識されたセミナーでした。

### 参考文献

友 相馬登(二〇一二)『横井時敬の熊本時代』レジメ。 |田清彦(二〇〇九)『横井時敬の足跡と熊本』東京 農大出版会。

熊 本県立大学編(二○一二)『ジェーンズが遺したも の』熊本日日新聞社

その他

場

農学

# 世界に先駆けた教育

大農学部)

校 駒

(後の東

Crops in Asia が、東京農業大学世田谷キャンパスにおい International Seminar on Emerging Infectious Diseases of 京農業大学(TUA)と Food (FFTC)との 共催による and Fertilizer Training 東京農業大学教授 2012 TUA 秋啓子 -FFTC Food

ことは確実

ジェーンズの

Center

影響による

機 よる講演が行われ、参加した関係者は約五○名、 ました。日本を含め七カ国十七名の招待講 て 二〇一二年十月二十日、二十一日 学や研究機関だけでなく、植物防疫に関わる行 名となりました。,アジアの食用作 た、学生・院生の参加者は二日間の合計が約一五 本、およびアジア太平洋州の作物保護学に関わる大 たな問 関、 種苗会社など様々なセクターの連携の重要性 題となりつつある病害。をキーワードに、 物栽培において新 に開 演 催 され 者 ま 政 日



\*アルバム 根瘤病

博 ンとして図書館からご提供いただいた、白井光太郎 士の撮影した植物病害の写真アルバム、病徴と顕 さて、この会場において、 東京農業大学のコレクショ

た。 光太郎博 微 鏡 英文の解説には は、 観察図、そして、 一九〇六年に世界で最初の植物病理学研 士;白井光太郎博士(一八六三-一九三 日日 植物の彩色画 本の植物 病 が展示されまし 理学の父 白 井



究室を東京大学に創 した人物であり、 東京農業大学の教授と 九一九年まで教鞭を ても 一九一五年から また、 設

校

では内外からの多数の植物病理学関係 的 ていたため、長い歴史を誇る東京農業大学で、 ○名近い会員を擁する。 して活躍した。 病 な観点からもごく早 理学会を設立し、 現在、 日本植 い時 九一八年からは初代会長と 」と紹介しました。セミナー とった。その間、 期 物病理学会は二〇〇 から 植 物 者が参加 病 日本植 理学の教 世界 L 物



\*植物彩色画 枇杷

関 太

するコ

郎 井 たこと、

白

光 15

育

が

行

7

15

わ れてい

ンがある レクショ

ことなど 15 が集まっ ていまし

た。

0

関

## 樋口雄彦(二○一二)『箱館戦争と榎本武揚』 大学史関係新刊書の紹介 吉川弘文館、二六〇〇円。



として刊行され 史」シリー 館の「敗 著者の樋口雄彦氏 本書は 大著『沼津兵学 者の 吉川 - ズの ー 日 弘 文 册 本

た。 ではなく、 後」「雪冤への道」「戦友の再結集」の各章で描き出さ 多彩な姿が、「箱館戦争断章」「生き残りたちのその を辿った者。官には就かず、 イトルは榎本武揚となっているが、主人公は榎本一人 れている。 臣)である。 の研 世捨て人の途を選んだ者、等々。本書では、その 驥足を展ばした者。宗教家に転じていった者。 榎本のように明治新政府に登用され、栄達の途 究』など、旧幕臣の研究で知られる。 箱館戦争の多くの「降伏人たち」(旧幕 降伏人たちの戦後の軌跡は様々であっ 民間にあって実業の世界 本書のタ あえ

で、 ある。 が、一八八五年に誕生した静岡育英会もその一つで となったのは、 箱 以する記 口 業大学の前身である。 立する。 のちに独立して私立東京農学校となった。 絵ならびに本文に掲載されている「私立東京農 館 戦後、 静 岡育英会は一八九一年、 述は、 育英黌の四つの学科のうちの一つが農業科 碧血 明治に入り、 短いながらも重要である。また本書 会、 旧 本書における静岡育英 交会、 旧幕臣たちの再結集の場 同 方会、 東京に育英黌を 葵会などだ 会に

設

学校卒業証」と「育英黌の及第証書」(第一期生・井 る。(友田記) 口 幹夫氏)はわが大学史にとっても貴重な資料であ

### 集後記

ご寄稿をお願いしました。さらに、夏秋啓子先生に は、 された横井時敬の熊本時代に関連する知見について です。また、相馬登先生には、 の書です。榎本が育英黌の管理長であった時代のもの 光 からは、 していくことにいたしました。 『大学史料室通信』第二号をお届けします。 太郎史料の展示についてご報告をお願いしました。 本年十月に本校で開催されたセミナー 大学史料室が所蔵する史 第 先生が最近明らかに 回 料を逐次、 目は、榎本武 での白 紹

本文中で\*印の付いている資料は当史料室の所蔵資料です

く収 結構ですので、左記までご一報くだされば幸いです。 各 種情報などがございましたら、 当 集しております。 史料室では東京農業大学史に関する資料をひろ 東京農業大学史関係資料や、 どのようなことでも

## 京農業大学

世 田谷学術情報センター **T**156-8502 図 書館)大学史料 室

東京都世田谷区桜丘 話:03-5477-2526

FAX: 03-5477-2546